

世紀末ウィーンの 2 人の建築家を対象とした「装飾」に関する研究

Study on the "ornament" for two architects of Wiener Moderne

齋藤武¹, 杉本将平¹, 〇矢嶋宏紀¹, 山中新太郎²

Takeru Saito¹, Shohei Sugimoto¹, *Hiroki Yajima¹, Shintaro Yamanaka²

1. はじめに

装飾行為は必然だったのではないだろうか。文字も言葉も持たない頃から、人類は原初的な装飾行為を行っており、装飾によって飾られた時代は、人類史の長期にわたっている。古くから行われてきた装飾は、人間の本能的な欲求からくる行為だったのではないだろうか。しかし、世紀末ウィーンにおいて、装飾は批判の対象となり、装飾の価値は失われ、モダニズムの到来とともに排除されるべき対象となった。このとき考えるべきことは、装飾が付加する場を失ったことである。そもそも装飾とは、ある飾るべき対象が存在して、それに対して従属的に付加されるものであり、付加されるものがあって初めて付加する装飾は存在するのである。この装飾の従属性は建築においても同質であり、建築の古典意匠である様式に装飾が付加するという従属関係が成立しているのである。そして世紀末ウィーンにおいて批判された装飾とは、まさに様式に従属している装飾であった。

しかしながら人間の本能的行為である装飾が、批判され、失われたという見解に対し、私たちは疑問を抱いている。そこで、装飾というのは失われたのではなく、必然的行為として概念や表現手法を変えて存続していたのではないだろうか、という着意が本論文のきっかけである。

装飾が失われた現場である世紀末ウィーンにおいて、オットー・ワグナーとアドルフ・ロースという当時の二人の建築家は、装飾が批判される国情を理解し、批判対象となっていた装飾から、自らの建築によって逸脱を図ろうとした。過去の装飾から逸脱を図ろうとした 2 人の建築家の作品を分析することで、過去の装飾から概念や表現手法を変えて存続している装飾の諸要素を見つけ出し、装飾が必然性を見出すことを本論文の目的としている。つまり本論文は、装飾行為における必然性を、世紀末ウィーンにおいて見出そうとする試みである。

2. 分析方法

オットー・ワグナー及びアドルフ・ロースの建築のこれまでの古典建築の要素には見受けられないような要素に着目する。この外観における逸脱していると考えられる要素（オリジナル要素）を抽出していくため、検証対象となる作品を、それ以前に建設された古典建築と比較しオリジナル要素を、参考文献を参照しながら抽出していく。まず各建築家の作品を Fig 01、Fig 02 のように古典建築との比較を図で照らし合わせ、挙げられた要素を Fig 03 のリストにまとめる。そのリストから、オットー・ワグナーとアドルフ・ロースの建築のオリジナル要素がどのような傾向を持っていたのかを考察していく。

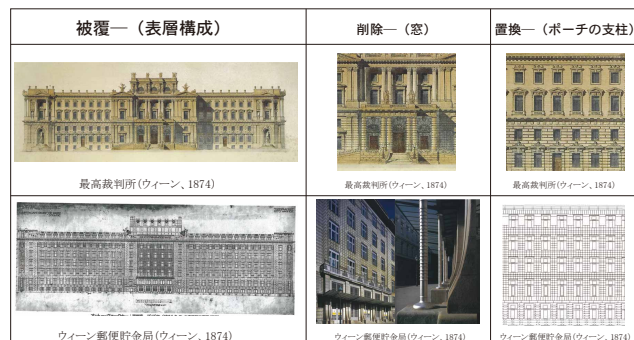


Fig 01 オットー・ワグナー設計
ウィーン郵便貯金局の検証

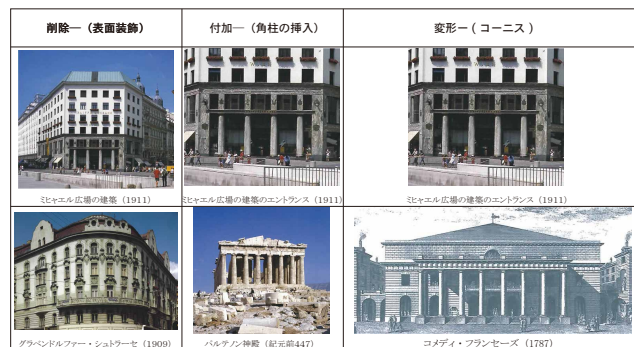


Fig 02 アドルフ・ロース設計
ミヒャエル広場の建築の検証

3. 分析結果

オットー・ワグナー作品		オリジナル要素	アドルフ・ロース作品		オリジナル要素
Miethaus Linke Wienzeile 1898		削除ー(立体造形物) 被覆ー(マジョリカタイル)	House on Michaelerplatz 1911		変形ー(コーニス) 付加ー(1層の支柱) 削除ー(表層装飾)
Kirche St. Leopold 1902-1904		被覆ー(大理石板) 被覆ー(銅板)	Steiner House 1910		変形ー(ヴォールト屋根) 併置ー(シンメトリー)
Miethaus, Neustiftgasse 1909		削除ー(表層装飾)	Scheu House 1912		借用ー(ジグザット) 削除ー(表層装飾)
Lupusheilstatte 1908		削除ー() 被覆ー()	Tristan Tzara House 1925		変形ー(二段構成) 削除ー(2層目の表層装飾)
K.K.Postsparkassen-Amtsgebäude 1903-1910		付加ー(表面構成) 置換ー(ポーチの支柱) 削除ー(窓)	Moller Villa 1928		併置ー(シンメトリー) 削除ー(窓)

Fig 03 作品分析リスト

分析の結果から、2人の建築家の作品からオリジナル要素を抽出でき、その中から彼らの建築に見られるオリジナル要素に5つの傾向が見られた。

- ・削除：古典建築として付加されるような要素（ペディメント、コーニスなど）をなくすこと。
- ・被覆：立体的な装飾を表面に付加させるのではなく、素材やタイルや仕上げ材などで表面を覆うこと。
- ・置換：古典要素のモチーフを別の要素や素材などを用いて置き換えること。
- ・付加：正統ではない位置に古典的モチーフを添付すること。
- ・変形：プロポーションの変更や形態操作を施し、古典的な構成を崩すこと。

4. 考察

オットー・ワグナーの建築には古典的な要素が一貫して見受けられ、そこにこれまでの古典建築の要素にはない平面的な装飾要素や構造材を新素材などに置き換えるなどの操作という新しいオリジナル要素が従属的に付加してくることがわかる。また、ペディメントやコーニスなどの立体的な要素が削られていることが分かる。

アドルフ・ロースの建築においては、古典的な要素を一部用いてオリジナルの操作を加えて使用している。これは、ここに挙げた作品以外にもロースの作品の多くに見受けられることである。また、プレーンなファサードや、テラスなど、これまでの様式の古典要素をあまり用いずに建築を作っており、表面に付加するような装飾は少ないことが分かる。

これらのことより、「装飾の従属性」がワグナーの建築には見受けられるが、ロースの建築にはなくなっていることが考察できる。

5. 結論

作品分析より、ロースの建築の表層には、物質としての「装飾」は現れておらず、以前とは異なる形で「装飾への欲求」表現することで、他の建築作品と区別しようとしていた。つまり、「装飾の従属性」については彼の建築の表層からは見受けられなかったが、彼の「装飾への欲求」は失われていなかった。

近代以前は「様式」に従属する形で「装飾」は用いられ、近代以降では、物質的なものではなく概念的な「装飾への欲求」という形で「装飾」の効果が用いられていたと考えられる。

参考文献

[1] 「近代建築」, 2007年発行, 山崎正和 [2] 「ウィーンの都市と建築 様式の回路を辿る」, 1990年, 川向正人
[3] 「建築の世紀末ウィーン」, 1977年, 鈴木博之 [4] 「装飾と罪悪」, 1908年発行, アドルフ・ロース